

## 「鹿野祭り」の似合うまち ー鳥取市鹿野町の景観まちづくりー

鳥取県 鳥取市長 竹内 功 氏

鳥取県の鳥取市長、竹内功です。鳥取市鹿野町の景観まちづくりについてご紹介をさせていただきます

鹿野祭りの似合う町というのが、この景観まちづくりを通じたテーマで、表紙の写真は鹿野町の景観の一部をあらわしたものです。右上の写真は虚無僧行脚という毎年やっている行事のときの姿で、この暗い夜の風景がぴったりという感じの町でもあります。

鳥取市は、西日本の鳥取県の東部にあり、人口は最近の数字ですと19万7,349人と20万人を少し切っていますが、平成17年10月に20万人以上の都市として特例市になっています。人口減少がその後少しずつ続いているということです。面積は765.66平方キロメートルで、合併して3倍ぐらいになりました。鹿野町は鳥取市と平成16年11月に合併した町の一つで、鳥取駅から西に二、三十分の位置にあり、世帯数は1,400世帯、人口は4,400人です。

この町の中心部は8つの町でできており、以前、亀井茲矩公<sup>これのり</sup>の城下町でした。その時代というのは1581年からで、江戸に入って1617年に、この亀井公は第2代の亀井政矩<sup>まさのり</sup>の時代に、島根県の津和野に転封をされ亀井家は津和野で明治を迎えるということになります。ですから、津和野の前はこの鹿野町にいたということで、37年の治世の間、大変立派な政治をしたと地域の方に慕われているのがこの亀井公です。

8つの町の町内会が、この城下町であった伝統を引き継いで、鹿野祭りの伝統を400年間守ってきています。この8つの町というのが鍛冶町、大工町などの町であり、城山神社の祭礼が鹿野祭りと今呼ばれているものです。400年の歴史を誇るお祭りで、今では2年に一度の本祭りと、その間の年に少し規模の小さな祭りをするようになっていきます。祭り当日は見ず知らずの方でも座敷に上げてもてなすという、大変美しい良い習慣がありまして、次々と家に上がっていると、お酒とか料理で本当に祭りを余り見る間もなく満足してしまうというようなお祭りです。

次に、まち並み整備の経過について少し年表的にお話しします。

昭和18年の鳥取大震災で多くの家屋が被災しました。鳥取大震災は鳥取市内、今の鳥取の駅周辺など市街地で大きな被害が生じましたが、鹿野町でも相当な被害がありました。これが昭和18年（1943年）で、それから50年たった平成5年（1993年）ごろにまちづくりの動きが出てきます。なぜ50年かというと、50年ぐらい経つと木造の建築は建て替え時期を迎える、加えて、

だんだん従来の伝統的日本建築からプレハブ住宅とかいろいろな住宅の形態、洋風の建物などが出てくる中でこの動きが地元から出てきたわけです。

平成5年の住民意識調査によれば街なみ整備は必要だという方が73%、街なみ整備に協力するという方が93%ということで、意識が非常に高まった状態がアンケートにも表れています。

その後、平成6年、7年にガイドラインなどができ、8年から町内ごとの街づくり協定が結ばれ、いわゆる街なみ環境整備事業という事業が現在に至るまで続いています。平成8年から数えると15年間、今年度まで続いて行われ、平成26年度ぐらいまで実施予定です。

その後、平成16年11月に鳥取市と鹿野町は合併します。この時、鳥取市は周辺の6町2村と合併して、9市町村が合併するという、鳥取県内でも、また全国的に見ても大きな規模の合併を経験しています。その中で、鹿野町では、この景観まちづくりの形成の営みがずっと続けられてきています。行政と地域住民の皆さんの連携、協働という取組として続いてきているということです。

平成18年6月、鳥取市は景観行政団体となり、平成19年度に鳥取市景観計画を制定して、この中で鹿野城下町景観形成重点区域というのも定めています。そのほか3カ所、こうした景観形成重点区域を市内で定めています。

次に、街なみ整備の考え方、また、取組の状況を説明します。

整備の目的としては、景観に優れた住環境を創出し、住民が誇りを持って定住できる町にするということで、ところどころに商店もありますが、ほとんどが住宅地なので、こうした街なみを誇りが持てる形にする。そのときのねらい、目標として、城下町の特徴を踏まえながら、鹿野祭りの似合う和風の街なみ景観を整備・保存しようということで、鹿野祭りを整備のテーマとした取組であります。

鹿野町は、もともと400年前は城下町でした。ただ、江戸時代には今の鳥取市の中心市街地、久松山のふもとに鳥取城が、石高でいいますと32万石の鳥取藩の城下町があつて、鹿野町は城下町という形ではありませんでした。しかし、城下町の歴史が深く地域に根差していて、地域の皆さんの思いとか魂の中に、地域の心として城下町の歴史があつて、鹿野祭りということを中心にまちづくりを考えていくことになったということです。

街なみ整備の推進方法としましては、住民主導で整備を推進するというので、多少の補助金を出しましたが、考え方やどういう姿にするのかについては、専門家の支援もいただきながら住民が主導しています。通りごとの整備のテーマを作成したり、8つの町内会ごとに独自の公的空間整備の計画を策定したりするなど、自分たちの町は自分たちでつくるという思いを非

常に強く持ちながら整備が進められたということです。

行政と住民の役割ですが、行政の役割として、公的空間の整備は、通りの美装化などいろいろなことがあるのですが、それ以外に私的空間の整備、住宅やいろいろな建物の外観を整備するときに住民の積極的なかわりがあります。ここでももちろん、公共的な財政支援なども行いました。鹿野祭りの屋台を通すために電柱やカーブミラーなどを曲げてつくといい街なみも公的な対応の一つになると思いますが、そういった街なみをつくっています。

公的空間整備の例として、石橋歩道や道路の縁石、水路改修について、自然石を使った水路を整備したり、石橋を造っています。また、ポケットパークなどをつくっています。道路をアスファルト舗装から自然な土色のカラー舗装に変えるというようなこともしています。要所要所に石行燈をつくって、明かりを灯し、各家庭のほうでは自分の家の家紋などを入れた行燈を軒下にぶら下げるといったようなこともしています。

次に、私的空間整備の一例で、住宅については、ガイドラインがあり、それに従って修景しています。これは壁面をそろえるとか、平入りの屋根にするとか、軒高に配慮するとか、瓦で葺く、壁を仕上げる、建具で装うとか小物に気遣うとか、いろいろな要素があります。駐車場とか車庫を垣とか塀で囲うとか、いろいろな工夫をした建物がずらっと並ぶような町になってきています。

このような住宅修景は平成8年度から21年度まで73件あり、主要な街道に沿った形で行われています。平成22年度、あるいは来年度も、それぞれ時間をかけて行うしかないため、ゆっくりとそういう形成がなされているという状況です。

協定の実効性の担保という点について、申請者は町ごとにある街なみ協定運営委員会、先ほども言いましたように8つの町があるので、自分の住んでいるところの街なみ協定の運営委員会に事前相談や申請をして、そして、鹿野町の総合支所、これは合併後、町役場に置いている総合支所なのですが、そこの地域振興課を経て、審査委員会を経て、建築に至ります。地元の町内会段階で第1段階の審査指導が行われ、最終的にも結果通知などが出てくるということです。それにより、鹿野の街なみは鹿野らしさを醸し出す内容になっています。

実際の街なみの写真がいくつかありますが、例えば郵便受けを木製にする、たばこの自動販売機を格子で囲むなど、いろいろなことがあります。駐車場に建物の一部になるような形で塀を設置して連続性を確保するというようなことなどもあります。

このように住民によるまちづくり運動として発展してきた中で、幾つか重要なNPO法人などの存在があります。平成13年から、NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会というのが、

鹿野の街なみを活用したまちづくりを考える住民組織として活動を始めています。それからもう一つは、市も出資しておりますが、株式会社ふるさと鹿野が合併前の16年10月にでき、公共施設などの指定管理なども行いながら、第三セクターとして地域の中で大きな活動をしています。それから、最近では、住民の出資によって設立された株式会社サラベル鹿野が、古い建物を買い取って活用するといった活動をしています。

次に、まちづくり活動の拠点を少し紹介します。「鹿野ゆめ本陣」が平成14年4月にオープンしました。街なみが伝統的な歴史的な街なみにつくり変えられていく過程で、町に興味を持って来られる方もいますし、地元の方も何とかこれを生かしてまちおこしをしようということもあり、「鹿野ゆめ本陣」が立ち上がりました。これは、いんしゅう鹿野まちづくり協議会の1号店として、平成21年度の利用者も1万1,000人と、コンスタントにお客さんが訪ねていただけの場所になっています。

ここは、余り食事などを考えず、ちょっとした小物などを販売していて、もう一つお食事処の「夢こみち」というのがその後の平成16年にオープンしました。大ヒットのすげ笠弁当というものがあり、鹿野の町では以前からすげ笠づくりが盛んで、すげ笠に食材を乗せて食べるという弁当をこの土地柄で出しています。実は、大阪市の東成区もすげ笠で有名で、そことの交流もしています。

それから、まちづくり活動の拠点として、もう一つ最近生まれたのが「しかの心」というところで、平成20年6月にオープンしました。これは、築75年の木造の大きな建物で、もともとは縫製工場だったものが、廃墟みたいになっていたものを、カフェ、イベント会場としてまちづくり合宿などに利用するというので、サラベル鹿野という株式会社を地元の人が設立し、拠点に仕立て上げています。これは、鹿野城址に一番近い場所にあります。

それから、行政が大きくかかわったのが「鹿野往来交流館」で、童里夢（ドリーム）と呼んでいます。この町では、先ほどからの「ゆめ本陣」などでも夢を使っていますが、童里夢という愛称をつけた「鹿野往来交流館」を22年9月にグランドオープンしました。鹿野の町のいろいろな歴史・文化・伝統的なものを映像や展示などで体験でき、また、小さな多目的ホールのようなものも入っています。もともとは農協の古い建物があった場所を、合併して農協の建物が使われなくなり、鳥取市が買い取って建物を建てました。これは新たな鹿野の交流拠点であり、情報発信の拠点になっています。外構の一部は鳥取方式による芝生化を実施し、緑の芝生になっています。また、灯籠などは地元の人に寄附していただいでいて、こういった拠点づくりにも地元の花がかわり、できあがっています。

まちづくり活動への評価ですが、ここに各種表彰を挙げています。平成16年から22年にかけて、特に今年度は国土交通省の手づくり郷土賞（大賞部門）を受賞しました。この手づくり郷土賞は平成18年度にも地域活動部門を受賞しました。地域の方が積極的に活動して、良い景観とまちづくりをしているということで、非常に評価をいただいています。

さらに、最近の動きとして、中国縦貫道の兵庫県佐用から大原、智頭と通って鳥取インターまでの鳥取自動車道が開通しました。鳥取インターから、今度は西に山陰自動車道が伸びています。鹿野町自体は山陰自動車道の沿線であり、鳥取自動車道の沿線ではないのですが、因幡街道交流会議というところで鹿野の皆さんが熱心にその事務局を務めています。こういった縦の連携、活動の拠点にいんしゅう鹿野まちづくり協議会、あるいはふるさと鹿野が積極的に取り組んでいるということで、この因幡街道交流会議の拠点となって、ほかの宿場町、あるいは城下町とも繋がっていく体制をとっています。

最後に、この鹿野の景観まちづくりを恒久的に続けていくためについてです。鹿野の街なみ整備活動は平成22年度でおよそ17年間、地域と行政が協働して魅力ある景観まちづくりを継続してきました。合併から現在、満6年を経ていますので、11年間、合併する前に町としてやってきたわけです。それを引き継ぐ形で鳥取市の鹿野町としてそれを続け、高く評価をいただくところになっているということです。このような状況を高いレベルで継続させていくということが一つ大きな課題です。

ただ、取組の中で、鹿野の町では城山の整備をしていこうというような動き、里山の、例えば春は桜、秋になると紅葉の木を植えて、景観を良くしようというような動きも起こっています。また、温泉がわきますので、温泉も町の活性化に生かしていく。それから、「鳥の劇場」という劇場ができました。中島さんという鳥取市出身の方が鹿野町で、「鳥の劇場」というのをオープンして、演劇祭などをやっています。さらに、鹿野そばということで、ソバを栽培しているので、ソバの白い花が季節になると咲き、そば打ち道場などもやっています。また、最近ではイノシシが多く、鳥取市でもイノシシを毎年1,000頭ぐらい捕獲しています。そのイノシシの一部はこの鹿野にある解体処理場を経て、シシ肉ということで特産品化を図っていて、そのような取組もあります。一つの景観的なまちづくりを地域の方が熱心に推進する中で、いろいろな新しいアイデアや取組がそこに加わって魅力的な地域を形成してきているというのが私のご報告です。

鳥取市は9つの市町村が一緒になりました。それぞれの市町村がいろいろな地域の資産を持っています。鹿野の場合はこれであり、例えば、福部村というところが一緒になりましたが、

鳥取砂丘については、ジオパークということで大きな、景観面でも重要性のある世界ジオパークへの加入が図られています。合併を通じて、新しい資源を鳥取市の中で生かし、発展させていくという営みをやっているところです。

ご清聴ありがとうございました。